

十八世紀イギリス小説概観

榎本 誠

この小論は、平成六年二月に行われた、国際経営研究所主催「研究サロン」での発表原稿に若干加筆・訂正を加えたものである。

一 序論

- (1) イギリス十八世紀の時代背景
- (2) 十八世紀イギリス文学の特徴

二 近代小説の発生

- (1) 社会的要因
 - (2) 文学的特性
 - (3) 十八世紀小説概観
- 三 ローレンス・スターンの場合
- (1) 牧師スターンの生涯

(2) *Tristram Shandy*

- (3) *A Sentimental Journey*
- (4) 評価と意義

四 終わりに

一 (1) イギリス十八世紀の時代背景

とりあえず、十八世紀イギリスの時代的な部分から話しさせて頂きます。一六八八年の名誉革命によって国王となったウイリアム三世が一七〇二年に死去して、次のアン女王の在位が一七〇二年から一七一四年であります。その後一七一四年から一七二七年がジョージ一世、次のジョージ二世が一七二七年から一七六〇年までと続き、さらにジョージ三世が一七六〇年から一八二〇年となっています。ご存知のように、アン女王の死去によつ

てスチュアート朝が終わり、ジョージ一世から現在のイギリス王室の祖先となるハノーヴァ朝が始まるわけです。この間に一七〇七年にはスコットランドとの合併で連合王国が成立し、スペイン王位継承戦争（一七一三年ユトレヒト条約）が行われます。政治的にはアン女王時代のトリーとホイッグ両政治勢力の拮抗状態から、ハノーバ朝初代のジョージ一世がトリー勢力をスチュアート朝復権を目指すジャコバイト (Jacobites) とみなしたことによって、政治情勢はトリーからホイッグへとシフトすることになります。（前世紀の王制復古の時代、チャールズ二世の治世末期に王党派をトリー (Tory)、反対党をホイッグ (Whig) と呼ぶようになったのが始まりと言われています。）スチュアート家の復権を目指す動きが残っていたのですが（ジャコバイトの反乱）、これらがことごとく失敗に終わり、ウォルポール (Robert Walpole) が宰相の地位に就いて（一七二一年）、政局は安定していくことになりました。彼が国王の庇護のもとに内閣を組織し、二十一年の長きにわたってその地位を保つわけです。このウォルポールは平和主義と大陸不干渉の方針を持ち、外交手腕を発揮していたわけですが、基本的に海外進出と自由な貿易を求め、気運がイギリス人にはあり、その点でスペインとの摩擦が生じていました。一七三三年からのポーランド継承戦

争には巻き込まれないで済んだのですが、一七三八年のいわゆる「ジェンキンスの耳」事件が起こるに至って、民衆はウォルポールの平和主義政策を攻撃し、ついは一七三九年にスペインに対する宣戦となります。しかしながら、この戦闘はイギリスにとって是不利な展開となり、一七四二年にウォルポールは退陣することになるわけです。

ウォルポール後の政局は一時的に不安定でしたが、一七五七年にウィリアム・ピット (William Pitt, Earl of Chatham) がニューカースル (Duke of Newcastle) との連立内閣で政権を握り、既に始まっていた七年戦争（一七五六年〜一七六三年）を未だかつてない程の勝利に導き、五七年にはインドでのイギリスの支配権を確立し、五六年にはカナダを支配して、大英帝国の基礎を築くことになったわけです。これに続く息子の小ピット (William Pitt, the Younger) が一七八三年に首相となり、ナポレオン戦争を戦うことになりました。

イギリス十八世紀は「理性と啓蒙の時代」と言われております。まさしく、その意味では政局の安定と同時に、新たな時代への胎動が始まる、そんなバイタリティーに溢れた時代であったようです。先ほども触れましたが、科学思想の発展と技術開発によって、それまでの古い世界観や認識論から新しい世界観への脱皮が行われよ

うとする時代であったとも言えます。アダム・スミスの『国富論』、マルサスの『人口論』が出されたのもこの時代でした。

こうした政治・政局の流れとは別に、大雑把に言えば、学問の分野では、科学思想では十七世紀のニュートン (Sir Issac Newton) の影響がますます大きくなり、哲学でも十七世紀のジョン・ロック (John Locke) の経験主義的認識論の影響が大きいです。すなわち、このロックの経験主義的認識論はバークレー (George Berkeley) の主観的観念論や、ヒューム (David Hume) の懐疑主義等を生み出したと言われております。もちろんこうした思想・哲学が当時の文学や芸術に様々な影響を及ぼしていたわけです。

さて、こうした大まかな時代背景から、次に十八世紀イギリス文学全体について、かいつまんで少しお話ししておきたいと思えます。

(2) 十八世紀イギリス文学の特徴

それまでは、文学と言えば詩を指すことが一般的であり、また戯曲も韻文で書かれていたわけで、散文による文学作品は考えられなかった状況でした。しかし、文学史的に言えば、いわゆる「詩的精神が衰退し、散文的時代」であったと言われます。マシュー・アーノルドとい

う十九世紀の文芸評論家は、この状況を「理性と散文の時代」と評しています。確かに、十八世紀イギリス文学の特徴は、これまでになく散文の作品が輩出された時代と言えると思います。詩の分野で言いますと、アレクサンダー・ポープという詩人が、この世紀前半に活躍したことは有名です。彼は靈感や心情ではなく、理性や頭で詩作したと言われているように、理性や良識を重んじ、奔放ではなく抑制を、そして破格ではなく均整を求めました。いわゆる擬古典派と呼ばれる所以です。

十八世紀後半にはサミュエル・ジョンソン (ジョンソン博士) が活躍するのですが、彼もやはり古典派に属し、またこのジョンソン博士は辞書を編纂したり、『Shakespeare 集成』を編纂して、当時の文壇では大御所としてその名を馳せていました。

さらに、十九世紀初頭に盛隆を極めることになるロマンティズムの流れが始まったのも、十八世紀後半のことです。トーマス・グレイの情緒溢れる詩は、そのさきがけともいえるべきものであり、ロマンティズムの旗手であるワーズ・ワースも、この世紀の後半から活動を始めています。

こうした文学の流れの中で、十八世紀において特筆せねばならないのが、小説というジャンルの成立です。この点について少し詳しくお話ししたいと思います。

二 近代小説の発生

(1) 社会的要因

封建時代のしつぽが、次第に断ち切られ、すなわち王権も教会も次第に絶対権を失い、人権の思想が育まれていったことはこの時代の大きな特徴であり、そしてこれが近代小説の成立に大きく関わっていると考えられます。

いわゆる散文による物語は十六世紀から見受けられるものですが、それらがひとつの体系をなして発達してきたわけではなく、やはり文学といえは詩(もしくは韻文)であり、散文による物語はちよつと変った作品として断続的に見受けられる程度でした。但し、小説の先駆的なものはエリザベス朝時代にも現れており、『Euphues』、『フューイズ』や『The Unfortunate Traveller』、『不運な旅人』等のいわゆる『university wits』と呼ばれる人たちの作品があります。

詩(もしくは韻文)が主流として継続されていたという現象は、ひとつには韻文による作品の場合、表現上も、形態的にも様々な約束ごとがあり、また内容的にも理解する上でかなりの教養や訓練を必要とする要素が大きく、そのために一般大衆というより、貴族階級や知的特権階級と結び付いたものであったわけで、当時の社会構造として必然的な現象であったとも言われています。

十七世紀末から十八世紀にかけて、政治形態の変化に伴って、すなわち王権の抑制と民権の伸長により、次第に市民階級が生まれ、その社会的発言力が増していきました。もちろんその背景には市民階級が経済力を持ち、社会生活、特に都会生活がまがりなりにもそれまでのものより、人間らしいものへと移行し始めていたことも大きな要因でしょう。

また、十七世紀後半から現れてくる啓蒙思想の流れ、例えばジョン・ロックの新しい認識論や政治論が、人間の基本的な自由や社会契約説の立場から専制君主制を強く否定し、名誉革命に理論的根拠を与えたことは、大きな意味を持つわけです。彼の思想がジャン・ジャック・ルソーやトマス・ペインに受け継がれ、それぞれフランス革命やアメリカ独立の推進力となったとされています。

宗教の分野においても、十七世紀末から十八世紀始めにかけて理神論(deism)の思想が活発になりました。簡単に言えば、これは神を合理的に解釈しようとする説であったのですが、それは十七世紀の時代精神ともいえるピューリタニズムと、それにつづく宗教教義に関する論争や対立への反動でもあったようです。ただし、十八世紀中期にはこの理神論的風潮への反動としてMeth-odismが信仰復活運動として現れています。また、この

理神論の確立の支えとなったのは、ウイリアム三世の即位以降の信仰上の寛容主義 (Latitudinarianism) の傾向であつたとも言えるでしょう。

科学もこうした新しい時代精神を反映して、近代自然科学の祖といわれるニュートンの代表的著作が一六八七年に出版され、数学、物理学、化学、植物学等の各分野で研究が盛んに行われるようになりました。

このような時代の動きの中で新たに形成されてくる市民階級の人々は、大半が従来の芸術的素養や教養を備えた人々ではありませんでした。従つて彼等はもつと直截な、難しい手続きを必要としないものを求めたわけです。このような方向性が散文による作品、特に近代小説の成立の下地として大きく貢献したと言えます。

ジャーナリズムの発生と流行を、その表れの一つとみなすことが出来ると思います。この時期では、アディソン (Joseph Addison) とステイール (Sir Richard Steele) という友人同志による *The Tatler* (「タトラ」) 一七〇九年創刊、週三回発行)、『*The Spectator* (「スペクテイター」) 一七一一年創刊、日刊紙) の二紙が特に有名です。

十七世紀に *The London Gazette* という官報的色彩の新聞が始められており、一七〇二年に創刊された *The Daily Courant* (「デイリー・クラント」) は世界初の日刊紙でした。また後でも触れますが、デフォー (Daniel

Defoe) も一七〇四年から一七一三年まで *The Review* を発行しています。

また、こうした定期刊行物や書籍の出版・販売の近代化も、見逃す事の出来ない要因の一つだと思われます。この辺の事情は、箕輪先生翻訳の『イギリス出版史』(ジョン・フェザー著) に詳しいのですが、つまり「商品」としての作品を商う「文学市場」の成立と商人階級の成長を背景に、この時代精神とあいまって新しい読者層を育て、そうした読者の求める文学を出現させるようになったと言えるでしょう。

繰り返しになりますが、このような時代的、社会的趨勢がこのイギリス十八世紀に流れていたこと。即ち時代的パラダイムの大きな変化が、近代小説の発生と確立の状況を自ずから準備していたと言つてもいいと思います。この点で、安定的時代の十九世紀とは異なり、新たなものを創りだそうという気運、そして素材で粗削りではありながら、おおらかでバイタリティーに満ちていた時代であつたと言えます。そして、文学ばかりではなく、より広い分野にわたつて、従来のハイ・カルチャーからマス・カルチャーへの移行期としてもとらえられると思います。

(2) 文学的特性

さて、このような社会的潮流が近代小説の確立を促す下地であったことは言うまでも無い事ですが、文学のコンテクストの中で、この時期の近代小説の成立を考えてみたいと思います。

ここで言う近代小説の特質とは、簡単に言えば、story-telling (物語性) からさらに進んだplot (筋立て) の構築であり、character (登場人物) の人物描写あるいは性格づけの確立であり、また、theme (テーマ) が複層的になっていくこと、などがあげられるでしょう。さらに、端的な言い方をすれば、写実性 (reality) の有無、ということになるでしょう。これをさらに限定すれば、現実でありそうなこと (probability 「蓋然性」) ということになるわけです。例えば古来から抒情詩の形態で語り伝えられる物語があり、それがロマンス (romance) という形態に発展し定着していったわけで、さらにこのロマンスが先に触れたような要素を取り入れたフィクションとして、今までにはない新たなもの、即ちラテン語で *novella*、つまり *novel* (小説) と呼ばれることになるわけです。

そもそも私たちは簡単に「小説」と言うのですが、しかし、考えてみると「小説」という文学上のジャンルを定義するだけでも、これは大変難しくまた非常に大きな

問題を孕むものであります。何をもって「小説」とするのか、という点はここでは一応深入りしないことにしますが、我々英文学畑の者にとつては、*ENM* フォスターの『小説とは何か』という、今や古典的な著作がひとつの解答でもあるわけです。文学理論とは少し離れますが、実際にこの十八世紀以前の散文による物語作品と十八世紀以降の作品とを較べますと、やはりいくつかのはつきりとした違いが存在していると言えます。それはどのような点であったのかと言うと、作者の意識という点で大きな相違を持っていたのです。それまでの散文によるフィクションでは、読者を意識し、自分の語るあるいは書き綴る話がどれほど現実味を帯びているか等が、作家には殆ど意識されていないのです。偶然の出来事の繋ぎ合わせで満足していたと言うことも出来ます。しかし、作者が読者を意識し始めることによつて、一段と写実性を増し、蓋然性を追及することになります。その意味で、ストーリーからプロットへという、極めて重要なシフトが生まれてくるわけです。

また、先ほど触れた新しい時代精神との関連で言えば、読者が一般的な市民階級であることと結び付いて、具体的な描写と平易な文章で、それまでの一般大衆には縁の遠かった文学を、大衆に開かれたものへと移行させることになると言えるでしょう。

ここで、少し本題からは逸れますが、ストーリーとプロットの違いについて触れておかなければならないでしょう。先ほど挙げたE. M. フォスターによれば、「王様が死にました。そしてその後王妃も死にました。」というのはStoryであり、「王様が死にました。そして、その悲しみのあまりに、王妃も亡くなってしまいました。」というのはPlotなのです。即ち、Storyとは出来事を順番どおりに並べて語ることであり、Plotとはその出来事の中に必ず因果関係が含まれてくるものと言えるでしょう。

つまり、詩であれ、物語であれ、それらは言語による虚構の構築であるわけですが、そこに必要なのはイマジネーションであることは言うまでもありません。ただ、近代小説には先に述べたPlotという要素が入り込んでいるわけで、それは同時に読者のintellectが必要になるということです。これは、例えば単なる荒唐無稽なお話に胸躍らせていた少年期から、少し現実味を、人生の真実を感じさせる、純文学へと移行するようなものだと言ってもよいでしょう。

こうしたシフトが明確に、そして突如現れたのがこの十八世紀でした。例えば十七世紀末にはバニヤンの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress)が出され、その素地を作ったと言われます。そして、十八世紀初め、デフォ

ー(Daniel Defoe)が一七一九年に『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe)を表し、ついで一七二六年にスウィフト(Jonathan Swift)が『ガリバー旅行記』(Gulliver's Travels)を発表するわけです。

(3) 十八世紀イギリス小説概観

さて、イギリス近代小説の成立背景に触れたところで、実際の小説や作家たちについて、少し話しておきたいと思います。

まずは先ほど触れた、デフォーとスウィフトです。

デフォーは商人の息子として生まれ、父親は僧職に就かせたいと考えていたらしく、高等教育まで受けたのですが、彼は商人としてその後の一生を過ごす事になります。(但し彼が商ったものは、実に種々雑多なもので、明確には分っていません。)デフォーは生涯忠実な非国教徒であったのですが、彼のユニークな点は、彼の真摯な信仰が商人として生きることの依りどころとなっていた点です。後世に、「右手に聖書を、左手に会計簿をもって」と歴史家に評されることになるゆえんでもあるわけです。

『ロビンソン・クルーソー』はデフォーが五八才の時の作品で、彼は商人として成功した時期もあったようですが、二度の破産を経験し、その負債から生涯抜けられ

なかったと言われています。しかし、彼は政治論争において多くのパンフレット類を書き、自ら新聞を発行する等、きわめて多面的な、複雑な活動をしていたようです。デフォアの作品に共通して見られる特長は、彼の非国教徒としての人間観、世界観が色濃く、近代市民社会の基本的な考え方である個人主義 (individualism) が明確に表れているという点でしょう。ただ、その孤立的存在としての人間像は、アダム・スミスの人間像にまでは至らず、ジョン・カルビンの人間の姿であると言われると思います。

『ガリバー旅行記』を書いたスウィフトは、国教徒牧師としての地位を既に得ていた人で、様々な文筆活動(詩作、政治パンフ等)を行う中で、自ら風刺的散文に自分の本領がある事に気づき、『桶物語』(A Tale of a Tub) や『書物合戦』(The Battle of the Books) といった散文作品によって、その辛辣な風刺の実力を発揮していました。ご存じのように『ガリバー』は、「小人国」(Lilliput)、「大人国」(Brobdingnag)、「ラ・ユータ」(Laputa)、「フーイナムの国」(Houyhnhnm) といった架空の世界とガリバーという人物を設定し、既存の航海記のパロディの形をとっています。

この二作品は今でも世界中で読まれ、親しまれている作品ですが、当然当時も非常によく読まれていました。

『ロビンソン』は、徹底した写実と不屈の精神で困難を克服していくイギリス人の姿が読者の共感を呼び、「ガリバー」は痛烈な風刺と着想の奇抜さが注目を浴びたと言えます。これらはイギリス近代小説の先駆けとして位置づけられるものです。というのも、デフォアには事実ではない虚構を創り上げることに對して、清教徒的罪悪観がまだ残っており、また彼の小説には虚構の話と道徳的論文や経済学論文的なものが混在しているのです。スウィフトの場合はパニヤンと同様に、もちろんその人物描写や説話の技術には素晴らしい才能を示していますが、彼も論争上の目的のために小説の形態を利用したと言えます。しかし、いづれにせよ、近代小説への道を切り開く重要な役割を果たした作品たちと言えるでしょう。

さて、イギリス近代小説の確立における代表的な四人の小説家を、「小説という荷馬車の四つの車輪」(The Four Wheels of Novel Wain) と例えることもあるのですが、それらがこれから述べる、リチャードソン、フィールディング、スモレット、そしてスターンであります。

先ほどの『ロビンソン』からしばらく間をおいて、一七四〇年にリチャードソン (Samuel Richardson) の『パミラ』(Pamela, or Virtue Rewarded) が出版されま

した。彼は徒弟奉公人から身を起こし、三十才で印刷出版業を始めて成功を収めていました。彼は子供の頃から年長の婦人と同席することと、手紙を書くことが大好きという、変った性癖を持っていたらしく、五十一才の時にこの作品を書いています。『パミラ』はいわゆる書簡体の小説で、何の身分もない女中であつたヒロインが、自らの貞節を守り、それによつて奉公先の令夫人になるという、内容的には極めて通俗的な道德観に基づく、教訓的色彩を持つものなのですが、当時の婦人たちには評判となり、彼の文士としての名声をあげることになつた作品なのです。技法的には、この書簡体による構成は表現の制約があるにせよ、登場人物の心理を細かく表現するにはうつつつけの形式でした。この点が『パミラ』の特徴的要素であり、それまでには見られない作品に流れる人間関係への興味が、小説としての確立を明確に示しているといえます。また、デフォーからリチャードソンへの移行は「事実」から「虚構」への移行とも言われます。それは、作者の意識が「教諭諭す」ことから「楽しませる」ことへ向き始めていることを意味しており、「事実」の報告ではなく、「虚構」としての真の小説になつていられる理由なのです。そして、この一七四〇年以降、約三十年の間に十八世紀の目ぼしい小説が出現する事になります。

次に触れなければならないのは、フィールディング (Henry Fielding) です。彼は一七四二年に『ジョージ・アンドルース』(The History of the Adventures of Joseph Andrews and his Friend Mr. Abraham Adams) 一七四九年に『トム・ジョーンズ』(The History of Tom Jones, A Foundling) として一七五一年に『アミーリア』(Amelia) を表しています。フィールディングは先ほどのリチャードソンと違って、貴族の血をひく地主の家系に生まれ、名門のイートン校を終えて、オランダのライデン大学にも遊学したことのある、深い教養と学識を備えた人物であつたようです。その意味からもリチャードソンとなにかにつけて対照的と言われるわけです。彼は本来劇作家の道を歩み、当時の演劇界では相当な名声を得ていました。ただし、この時期は演劇の衰退期にあり、後世に残るようなものは殆どありません。一七三四年にフィールディング自身の経営する劇場で上演した政治風刺劇が、当時の政府を刺激してしまい、演劇界への弾圧政策を引きだしてしまいました。そのため、彼は劇作を諦め、それ以降は法律家として職を得て、そのかたわらに新聞の経営や執筆を行つていました。後に司法官として社会悪の矯正のために尽力したようです。

さて、彼はリチャードソンの『パミラ』の感傷的偽善

性、即ちヒロインの女中パミラが計略を駆使して自分の貞操を脅かした若主人の正妻となるのは、計算づくの貞淑さであり、その偽善的な道徳感に対してフィールディングは痛烈な批判として、彼の最初の小説『ジョーゼフ・アンドルース』を書いたと言われています。この作品はパミラの弟ジョーゼフを設定して主人公にすえ、美男子のジョーゼフが下僕として奉公する家の女主人に言い寄られ、それを断ったジョーゼフは追いつかれて、恋人ファニーの待つ郷里へもどる旅に出ます。その途中で、逆に上京してくる郷里の牧師アダムズとファニーに出会い、この三人が様々な冒険をするという内容になっています。なかでも主人公のジョーゼフに劣らずアダムズ牧師は、いはばドン・キホーテのような極めて純真な人の良い紳士として描かれ、その人物造形のみごときは評価に価するものだと思われれます。この作品に限らず、代表作の『トム・ジョーンズ』にしろ、『アミーリア』にしろ、フィールディングは夫々の個性豊かな人物像を描き出し、また人間の偽善や儀瞞に対して容赦なく批判の目を向けて、滑稽に風刺しています。その意味でプロットの完成度の高さとともに、小説の醍醐味を明確に示したと言えるでしょう。

さて、次にスモレット (Tobias George Smollett) について少し触れておきましょう。彼は一七四八年に『ロ

デリック・ランダム』(The Adventures of Roderick Random) を出し、一七五一年に『ペリグリン・ピクル』(The Adventures of Peregrine Pickle) をそして一七七一年に代表作と言われる『ハンフリー・クリンカー』(The Expedition of Humphry Clinker) を表しています。スモレットはスコットランドの名家の出身で、大学では医学を学ぶのですが、中退して劇作家をめざします。しかしなかなか認められず、海軍の軍医を志願して軍艦に乗務していました。退役後ロンドンで外科医を開業していたのですが、それもあまり芳しくなかったようです。その間に風刺詩を発表したりしているのですが、それも全く認められず、今度は散文に転向して『ロデリック・ランダム』の出版でようやく評価を受ける事になります。彼の作品は、フランスのスカロンやル・サージュの伝統を受け継ぐ、いわゆる「悪漢小説」(ピカレスク) と呼ばれる作風を確立したことで、後世にも影響を残しています。扱われる内容は、主人公が様々な悪人に翻弄されながらも、その中から立ち直って行くというもので、特に『ロデリック・ランダム』は作者の実体験をもとにしたと思われるような、海洋冒険小説風の作品です。内容的にも、技法的にも、リチャードソンやフィールディングほどの創造性はないのですが、注目すべき点であると思えます。事実であるかのような見せかけをせ

ず、自由奔放といっているほど彼の話術は、先の二人の先輩をも凌ぐものといえるでしょう。

三 ローレンス・スターンの場合

さて、ようやく今日の本題へとたどり着いたわけですが、「四つの車輪」のうち最もガタピシしていると評される、スターンについてその生涯と作品を紹介しておきたいと思います。

(1) 牧師スターンの生涯

スターン (Laurence Sterne) は一七三三年十一月二十四日に陸軍将校 (中尉) の Roger Sterne の息子として、現在の南アイルランドの Clonmel で生まれました。

七人兄弟の長男でしたが、姉の Mary と末の妹 Catherine 以外は幼年期に亡くなっています。Sterne 家は York 郊外の Elvington に代々地所を持つ家系で、曾祖父は若くして Cambridge 大学 Jesus College の学寮長に選ばれ、王政復古後 York 大主教を勤めた Richard Sterne でした。Laurence は出生後約十年の間は父 Roger Sterne の連隊の移動に伴って、幼子を抱えた家族と共に、各地を転々とする生活を送っていました。一七二二年に Laurence は York の Woodhouse に住む伯父 Richard に預けられ、Halifax 近郊の Grammar school へ入ります。一七三一年に父 Roger は、一羽の鷲鳥をめぐる喧嘩

がもとで決闘をし、相手に刺されて一命はとりとめたものの、その後すぐにジャマイカ島へ派遣され、そこで熱病にかかって亡くなってしまいました。

Laurence は資産家であった伯父 (Roger の兄) の Richard Sterne や従兄の Richard の援助を受けて学校を終え、Cambridge 大学へと進学します。彼の曾祖父、叔父、さらに従兄たちも Cambridge の Jesus College であったので、Laurence も Jesus College の特待給費生として一七三三年に入学しました。その後 Sterne 大主教によって創設されていた奨学生に選ばれ、一七三七年に B. A. を取得し、一七四〇年には M. A. を取得しました。その後国教会の牧師としての職を得て、Elizabeth Lumuly と結婚し、Sutton の牧師館に住みます。以降徐々に聖職者としての地位も上がりますが、とりたてて有力者というわけではなく、当時ではごく平凡な田舎牧師としての人生であったようです。ただ、大学時代に知り合った友人で、裕福な、そして蔵書家であった Hall Stevenson とはその交流が続き、彼の書齋でフランスの滑稽文学やエラスムス、モンテーニュ、セルバンテスらの著作を読み耽っていたようです。

一七五九年にヨーク地区の宗教界の勢力争いに題材をとった風刺パンフを刊行し、名前が知られるようになりますが、教会の権威を損なう恐れありと友人から忠告を

受けて、焼却処分に同意したりしたようです。しかし、その後すぐに、後述の『トリストラム』の執筆にとりかかり、一応一・二巻を書き上げ、友人に牧師としてはふさわしくない作品だと言われたようです。ヨークの書店でもロンドンのドズリー書店でも出版を断られ、友人の批判を受入れて、文体とさしさわりのある部分に手を入れ、ドズリーに自費出版で出して成功したら改めて条件の交渉をするということで、翌年の一七六〇年一月に『トリストラム』の第一・二巻が刊行されることになりました。時にスターンが四六歳でした。この作品が大評判を得て、一躍スターンはヨークばかりかロンドンでも有名となり、社交界の名士たちと知り合いになると同時に、彼のユニークなキャラクターも評判となって、ますます人気が高まっていきました。当時の名優ギャリックによれば、スターンと晚餐をするには二週間前の予約が要るほどであったと言われています。またこれに気を良くして『説教集』一・二巻を出版し、Coxwoldに住い

りて芝居見物や社交界で名士（テイドロなど）と知り合い、パリでの歓迎に気を良くしていたようです。また、妻エリザベスとひとり娘リディアとの家庭生活もあまり暖かいものではなかったようで、特に妻エリザベスは病弱で、後年には神経衰弱のような症状にもなっていました。もちろん、このふたりの性格が合わなかったことも原因のひとつと考えられます。一七六二年以降はスターンとエリザベスのそれぞれが転地療養のためにフランスへ渡る事が多くなり、殆ど別居生活といえる状態でした。その後『トリストラム』は一七六五年に第七・八巻を出し、一七六七年に第九巻を出して、未完のままで終わっています。一七六八年にはもうひとつの作品『センチメンタル・ジャーニー』が出版され、『トリストラム』の時には増して好評を得て彼の人気が高まるのですが、身体の状態は思わしくなく、しばしばかつ血し、インフルエンザにかかって肋膜炎を併発し、ロンドンで死亡します。前年には知り合った若き人妻、ダニエル・ドレイパー夫人、エリザベスに恋をして、ドレイパー夫人がインドに居る夫のもとへ帰る際に、お互いに日記をつけることを約束しています。これは今世紀に入って『イライザへの日記』として出版されています。

(2) Tristram Shandy

さて、さきほども触れたように、平凡な田舎牧師であったスターンを一躍有名にした『トリストラム・シャンデイ』について、簡単に話しておきましょう。正式には *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* (『紳士トリストラム・シャンデイの生涯と意見』) という題名で、一七六〇年から一七六七年にかけて出版され、全九巻からなる大作です。この作品が世界でも指折りの奇書とされるのは、それまでの散文物語とも、またようやく確立しはじめた小説の形態とも全く異なる内容と形式を創りだしていたからです。取り敢えず、この作品の概略を述べて、大体のイメージをつかんで頂きたいのですが、まずもってこの物語(?)の概略をかいつまんで説明すること自体が難しいほどの、奇妙な、ふざけのめした作品なのです。

一応主人公とおぼしきトリストラム氏が自分の生涯を語り綴るといふ、全体としては自叙伝的形式を取っています。従って、著者はあくまでもトリストラム氏本人ということですが、しかし、彼が語り始めるのは、自分がこの世に生まれる前の、つまり母の体内に受胎されるころからなのです。しかし、ものの一〇ページも行かないうちに、自分の出生時に立合った産婆にまつわる話や、この産婆の説明に登場する Yorick 牧師なる人物の生涯

を語り、肝心のトリストラム自身の人生はいっこうに始まらないのです。その後も出産にまつわる様々なエピソードとゴタゴタが書き綴られて(文体的には語り続けると言った方が良いでしょうが)、ようやく第三巻でトリストラム誕生のエピソードが語られるわけですが、作者としてのトリストラムは「私の主人公たちが今は全員私の手を離れている——つまり、はじめて私もちよつと一休みの余裕を得たというわけです。——この間を利用して、ここで本書の序文を書いておくことに致しましょう。」⁽²⁾と述べて、「序文」をやおら書き始めるのです。しかも、彼の幼年期は時折他の登場人物たちの話題の中で語られるだけで、主人公らしく活躍するわけでもありません。

このシャンデイ家には、トルコ貿易に従事し、田舎に隠退して悠々自適の生活を送る父親 Walter Shandy と母親の Mrs. Shandy、またイギリス軍の大尉として活躍し、一七〇一年に負傷のため退役してこの家に居候している叔父の Toby (Uncle Toby) と彼の部下の Trim 伍長 (Corporal Trim)、そして先ほども触れた Yorick 牧師、近所の未亡人 Widow Wadman、さらには産科医師の Dr. Slop や Shandy 家の下僕 (オバーダイア) や女中 (スーズン) といった人物が入り乱れて、様々なユーモラスなエピソードが語られ、その間に絶えず作者トリス

トラムの随想的挿話が入り込んで、集積されていきま
す。第七巻では突然紳士となったトリストラムが大陸旅
行をする旅行記であり、結局最後の第九巻では叔父のト
ビーとウオドマン未亡人との恋愛事件のエピソードが語
られて終わってしまいます。

このように説明すると、どうもこの作品の大事な部分
がすべて抜け落ちてしまうようです。実際に作品を読ん
で頂くとよく分ると思うのですが、すなわち、この作品
では一貫したストーリーというものが初めから無いので
す。表面的には作者（語り手）のトリストラムがシャン
ディ家の人々の、雑多なエピソードを、自分の脳裏に思
い付くままに語り綴っている、という印象なのです。

さて、この作品の奇抜さ、特異さ、という点では、第
一には作品の構成の奇抜さという要素、第二に表現上の
奇抜さという要素、そして第三に内容的な奇抜さという
要素の三つの要素から説明出来ると思います。

第一の構成に関する奇抜さは、先ほども少し触れたよ
うに、一貫したストーリーが無いということです。つま
り題名が『生涯と意見』で、自叙伝の形態をとっている
ことから、当然クロノジカルに構成されている筈であ
り、主人公のたどる人生が描かれてしかるべきなのにす
が、実際には作中の主人公トリスラムは、たいした
役割をするわけではなく、ただ語り手として常に読者へ

対峙しているのです。しかも、構成上混沌とした印象を
与えるのは、語られる内容が物事の順番どおりではな
く、中断、脱線、挿入、そしてフラッシュバック的な手
法が絶えずつきまとい、どれが話の本筋でどれが余計な
ものなのかがはっきりしなくなるわけです。さらに、極
端な言い方をすれば、この作品は一七七八年の出来事か
ら始まり、一七一四年のエピソードで終わるのです。し
たがって、歴史的時間配列から言えばまさしく奇妙な感
覚を与える構成になっているのです。しかし、このよう
な奇抜さは、決してたらめな思い付きのままに生みだ
されたものではなく、スターンのある意味では周到なト
リックもしくは技法と言えるように思われます。すなわ
ち、別の読み方をすれば、それぞれのエピソードや出来
事が歴史的時間配列として、つじつまが合うように仕組
まれているのです。

It was some time in the summer of that year
in which *Dendermond* was taken by the allies, —
which was about seven years before my father
came into the country, —and about as many,
after the time, that my uncle *Toby* and *Trim*
had privately decamped from my father's house
in town, in order to lay some of the finest sieges
to some of the finest fortified cities in *Europe*—⁹

ここに出てくる Dendermond は現在のベルギーのアントワープ西南にあり、この箇所で言及されているのは、所謂スペイン継承戦争（一七〇二—一七一四）における一七〇六年の、イギリス軍が勝利をおさめた一事件なのです。五年前の一七〇一年に叔父トウビーはトリム伍長を伴って田舎へ引きこもり、ボーリング用の芝地で、伝えられるスペイン継承戦争の戦況をたよりに、模擬戦場を作ってその戦闘に熱中するわけです。また、先の Dendermond の勝利の七年後、一七一三年に父ウオルターは田舎の Shandy Hall に隠退し、この年はスペイン継承戦争の終結となるユトレヒト条約が結ばれ、Dunkirk が破壊された年になります。この Dunkirk 破壊に落胆した叔父トウビーは模擬戦闘の熱が醒め、隣人のウオドマン未亡人に恋をするのです。

『トリストラム』が出版された当時はいわゆる七年戦争の時代で、社会的関心もそのような国運をかけた事件に向けられていたようです。作品のなかで頻繁に言及されるナミュールの包圍戦やフランダーズの戦闘などは、二〇〇年後の我々よりもまだ当時の読者には馴染み深いものであった筈です。

いづれにせよ、作中のあちらこちらで語られている事柄は、こうした手掛かりによって、一貫した時間的なつじつまを合せる事ができるのです。この点をもう少し細

かく例を挙げてみましょう。

第一巻でトリストラムの出生に立合った産婆の話があり、彼女が産婆を開業したいきさつが語られます。この話の中から彼女の生まれた年を探る事ができるのです。

“in the course of her practice of near twenty years in the parish” (“この教区で彼女が二十年近く開業している間に”) “この部分から、産婆が開業したのはトリストラム出生の二十年前であり、彼が生まれたのは “On the fifth day of November, 1718 . . . was I Tristram Shandy, Gentleman, brought forth into this scurvy and disasterous world of ours.”⁶⁾ という記述から、一七八一年であることを考え合わせると、この産婆は一六八九年に開業したことになります。当時四十七歳であったという別の箇所（第九章）の記述から、彼女が一六五一年生まれであることがつきとめられます。このような細かい事例を挙げたのは、作品の脈絡のなさがスターンのでたらめな思い付きではなく、なんらかの意図をもって仕組まれた技法であることを説明したかったからです。

スターンはこの作品を歴史的時間配列（クロノロジカル）に書く事も出来た筈ですが、作品の背骨としてのクロノロジの否定は、作者スターンのなんらかの意思を示すものとして受け止めるべきものであると考えられます。

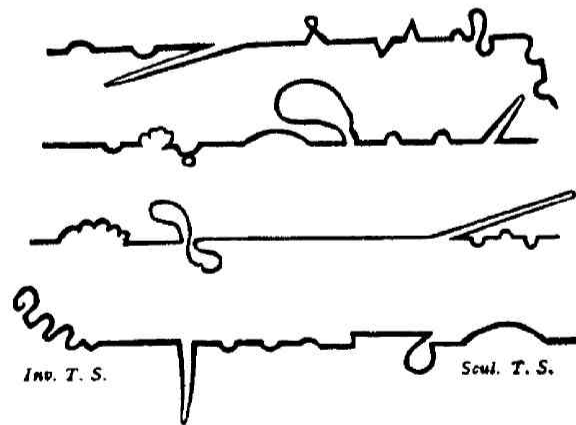
す。この点については、今回はこの辺でどめておきたいと思えます。

さて、第二の奇抜きの要素としては、その表現形態に触れなければならぬでしょう。また、それと密接に関連する第三の要素も考えておきたいと思えます。

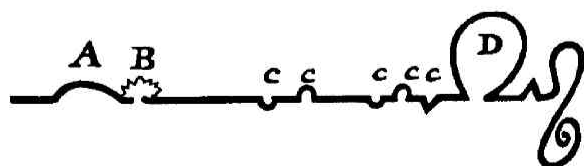
ここで言う表現形態とは作品中の語りの形式のみならず、言葉を越えた表現方法をも含むものです。例えば、作品をパラパラと捲って見るだけで気が付くのは、真っ黒に塗り潰されたページ、逆に真っ白な何も書かれていないページ、曲線、墨流し絵のようなマープルペーパー、そして多用されるダッシュとアステリスク。こうした奇抜さは読者の好奇心を掻き立てる単なる目新しさだけをねらったものではなく、ここにもスターンの意図的な仕掛けがなされていると考えられます。作中では、黒く塗られたページはYorick牧師の氏を悼むためと語られ、白紙のページはウオドマン未亡人の顔形を読者に思い浮かぶままに描いてもらうためだと説明されています。また、脱線につぐ脱線で、語り綴った跡をくねくねと曲がりくねった曲線で示し、これからは定規で引いたような直線で話を進めると公言したりします。

これらは作者特有のおふざけだと言ってしまうのは簡単ですが、どうも問題はそれほど簡単なものではないようです。作品の冒頭から一貫して言えることは、登

I Am now beginning to get fairly into my work; and by the help of a vegetable diet, with a few of the cold seeds, I make no doubt but I shall be able to go on with my uncle *Toby's* story, and my own, in a tolerable straight line. Now,



These were the four lines I moved in through my first, second, third, and fourth volumes. —In the fifth volume I have been very good,—the precise line I have described in it being this:



場人物同志の言葉によるコミュニケーションにおけるずれが存在し、それがひいては様々な、滑稽な事件や騒動へと発展するわけです。そしてこのような設定はロック (John Locke) の理論に基づいて説明されると作者は語っています。そこで作者はロックの『人間知性論』(An Essay Concerning Human Understanding) の「観念連

合」(association of ideas)を引き合いに出しています。ロックによれば、我々の心の中で複数の観念が、全くの偶然や習慣のために結合する場合があります、その結合される観念同志は似通ったものとは限らず、しかもこの結合は切り離せないほど緊密なもので、我々の心の中での一つも一緒になって現れてくるというものです。さらに、こうした本来結合するはずのない結合は、任意に、偶然に起こるため、それぞれの人間の性格や教育、興味といった違いに応じて、かなり異なる形をとるとされています。こうしたロックの観念連合理論は現代心理学のさきがけとも言うべき革新的なものであったようですが、スターンはこのロックの見解を作品の登場人物とその状況設定に援用していると云えます。

Shandy家の人々はそれぞれの連想のメカニズムに基づき思考回路を持ち、それらの質の差異が喜劇的な摩擦を生みだし、騒ぎを引き起こすように仕組まれているのです。例えば叔父トウビーはスロップ医師が部屋へ入って来たその姿を見て、突然ステイビヌスを思い起し、同じくスロップ医師が医学の進歩に関する話をしている途中で、フランダース遠征の際の大軍のことを思い起します。⁷⁾特に登場人物が自分だけの熱中出来る世界、趣味とか道楽と言っても良いのですが、そうした世界を持っている場合にはことさらこのような状況が明確になって

きます。後で詳しく触れるつもりですが、父ウォルターは論理好きで、すべてを論理的に説明しようと堅く信じ込み、また奇妙な学説を論じること熱中する人物として描かれています。また叔父トウビーは戦術や築城術にのめり込んでおり、すべてを軍用語で理解しようとする癖が強調されています。ウォルターは「鼻」に関する学説をトウビー相手に論じながら、真理とは極めがたいものだと嘆いて、堅固な真理は難攻不落で、激しい包囲戦 (siege) にもなかなか屈しようとしないのでよと語ります。しかし、トウビーはこの「siege」という言葉によって、自分だけの世界を呼び起こすだけで、全くウォルターの言う比喩的な意味を理解できないのです。さらに、次の様な対話へと続きます。

the word siege . . . in my father's metaphor, wafting back my uncle Toby's fancy quick as a note could follow the touch. — he open'd his ears . . .

'Tis a pity, said my father, that truth can only be on one side, brother Toby, — considering what ingenuity these learned men have all shewn in their solution of noses. — Can noses be dissolved? replied my uncle Toby.⁸⁾

これはほんの一例にすぎないのですが、こうした状況は観念連合と言葉の限界を、ロックの理論を具体的な状況に置き換えて示していると言えます。しかし、スターンはそれだけにどまらず、ロックが論理化し得なかつた別の表現の可能性を示しています。ロックは言葉による知的、論理的コミュニケーションの限界を指摘し、それゆえに文学的比喻の使用を嫌っています。しかし、スターンは登場人物の間の言葉による知的コミュニケーションの混乱を描きながら、一方で彼等は十分に意思の疎通を図っているのです。簡単に言うとその感覚的コミュニケーションであり、かれらは身振り、表情などを存分に使用する事で、またスターンは言外の意味を比喻や仄めかしを多用することで、明確に読者に伝えているのです。

その意味で、先ほど触れた、奇抜な印刷上の形態もスターンの内にある表現の可能性を広げる試みであったと言えると思います。ここからさらに問題を深めれば、一七世紀に始まる科学的論理性追及の流れとつながっているのではないのでしょうか。ロックのいう明晰な言葉の使用は決してロックだけの主張ではなく、「知的認識」の言語と「詩的情動的」言語との乖離は十八世紀ころに始まり、英国王立協会の成立とその趣旨にそった文体革命へとつながるものと言われています。言わば数学的明晰

さを目指す王立協会の成立は、言葉の多義性、弾力性、呪術性といった、ある意味での言葉の豊饒さを削り落とすことになるわけです。合理的精神、科学的明晰さ、直線的論理性、これらは言葉の持つ雑多な機能を排除し、ひたすら高度な、純粹化された記号性へと向かうのです。このような記号化された、中性化された言語による対象の限定化は、詩的情念をまとい、文学的創造を駆け巡らせる詩的言語と決別せざるを得ない状況へと、必然的に向わせることになるのです。

このような文脈から見ると、どうもスターンはルネッサンス的な感性の復権をねらっていたのではないかと思われるかもしれません。

(3) A Sentimental Journey

さて、『センチメンタル・ジャーニー』については、ごく簡単にふれて終わりにしたいと思います。A Sentimental Journey through France and Italyは一七六八年に出版され、これもまた『トリストラム』に劣らず当時好評を得た作品です。当時イギリスの裕福な階級は盛んにフランス、イタリアへの大陸旅行 (grand tour) を行っていたわけで、それに関連する旅行記が数多く出されています。スターンは転地療養のために二度大陸へ旅行

しているのですが、これは二度目の旅行をもとにして書かれたものです。しかし、決して客観的な旅行記ではなく、様々なフィクションが込められて、むしろ旅行記風の小説と言った方が良いと思います。

この作品は『トリストラム』にも登場したヨリック牧師が、フランス、イタリアを旅行するという設定になっており、ただし、イタリアの部分は書かれないうままに終わっています。この主人公ヨリックが会う様々な出来事や、それらにまつわる彼の思いを、旅行記風に書き綴ったものと言えます。しかし、この作品も『トリストラム』同様に、一貫した筋らしきものはなく、様々なエピソードや場面が繋ぎ合わされて、ヨリックが次々と旅を進めるその時間的な流れがあるだけなのです。彼の体験するエピソードはさほど大した事件でもなく、名所旧蹟などの紹介をするわけでもありません。修道僧との出会いや、貴婦人に対する思い、あるいはル・フィーバーという少年の身の上話、パリでの出来事など、事件とすら呼べないものばかりなのです。これらのエピソードを繋ぎ合わせ、ある種の統一性を生みだしているのは、語り手であり主人公であるヨリック自身だと言えます。つまり、彼の抱く様々な心の模様と、彼の思考とが、雑多な出来事に何かしらつながりを与えているのです。その統一性を生みだすもの、それがsentimentなのです。

ここで触れておかなければならないのは、題名にも示されている「sentimental」という語の意味合いについてです。この形容詞のもっとも古い用例は一七四九年で、十八世紀での用例は「characterized by or exhibiting refined and elevated feeling」（洗練された高尚な感情を表している）の意味で、「風雅な」という訳語が与えられるべき言葉でした。しかし、十九世紀の用例では「過度に涙もろい」というあまり好ましくない意味の用例が増えます。これはスターンのこの作品で、修道僧の墓や、頭のおかしくなったマリアという女性に対して流す作者の涙などの、感傷過剰気味の箇所が見受けられることから、今日的な「感傷的」という意味が生まれたようなのです。また英語のみならず、フランス語やドイツ語にもこの語が入っていったのも、この作品が大陸で広く愛読されたことを物語っています。

(4) 評価と意義

これまでごく簡単に作品の内容とその主な特徴を紹介してきましたが、十八世紀当初からも、瓢切とか猥雑であるといった批判がなされてきました。確かに古典の素養豊かなスターンは、ラブレールやモンテーニュ、セルバテンテス、またバートンなどの文体を模倣し、ユーモア、センチメンタリズムなどを利用してはいる点も多く見受け

られます。しかしこれらはいわゆる「博学の機知の伝統」(learned wit)とでも言うべきもので、決してスターン自身のオリジナリティを売り渡すほどのものではないと考えます。また先ほどは作品の新しい技法に注目して紹介したのですが、逆に古来の名作や現実から遊離した奇妙なスコラの論理学を嘲笑するような側面も持っている事を付け加えておきたいと思えます。

十九世紀には必要以上に批判され、低い評価を受けていたのですが、今世紀に入り所謂「意識の流れ」(stream of consciousness)と呼ばれる新しい小説形態が生まれ始め、再び注目されるようになり、新しい視点からの研究が行われてきています。今回お話したのも、こうした新しい評価をもとにしたスターンなのです。

日本では夏目漱石がいち早く「どこが頭で、どこが尻尾か分らない、なまこのお化けのような」と評し、『我が輩は猫である』の中にもスターンの手法が見受けられます。また、翻訳では朱牟田夏雄の名訳が出ています。井上ひさしの『吉里吉里人』では『トリストラム』の文体的影響が明確に見受けられますし、吉行淳之介の『湿った空乾いた空』はスターンの『センチメンタル・ジャーニー』に触発されて書かれたものとされています。

四 終わりに

今日は冒頭でもお話したように、十八世紀イギリス小説を概説させて頂きましたが、大体の雰囲気はお分り頂けたと思います。ただ、なにぶんにも極めて雑多な要素が入り乱れた時代であり、まとめてお話するには難しい面もあって、かなり乱暴な説明になったところもありますが、エッセンスを汲み取って頂ければ有難いと思えます。

スターンについてはさらに様々問題点や議論があり、今日はほんとは入門編といった程度に留めました。興味をもたれた方はぜひ一度お読み下さるようお勧めしたいと思います。ただ、いつも思う事は、あまり難しく考えるより、ただ作品を楽しむことで、そして読んだ後に何かしらに残るものがあれば、それは十分に存在意義のある、また価値のある作品であるということです。小説研究の宿命として、作品を切り刻んでこむづかしい議論を展開せざるを得ないわけですが、ふと二〇〇年以上を経てこうした議論と研究が行われているのを、草場の蔭でスターンはニタリと笑って、そんな難しいもんじゃないうと舌を出しているような気もするのです。

いづれにせよ、どんな切り口であれ、その料理法に見合う味わいを見せてくれるスターンの作品は、現代の私たちにとっては世界の奇書というより、世界の傑作のひとつ

とつに数えられるものだと思います。
ご静聴ありがとうございました。

(えのもと まこと／助教授)

註

- (1) エリザベス朝時代の Lyly, Marlowe, Nash, Lodge, Greene, Kyd, Peele等のオックスフォードやケンブリッジ大学出身の文学者への総称。
- (2) 『トリストラム・シャンデー』 朱牟田夏雄訳 岩波文庫 (上)三〇三ページ。
- (3) Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, ed. James A. Work (New York: The Odyssey Press, 1940), p. 416.
- (4) *Ibid.*, p. 45.
- (5) *Ibid.*, p. 9.
- (6) *Ibid.*, pp. 473-474.
- (7) *Ibid.*, p. 110.
- (8) *Ibid.*, p. 239.